

芥川だより

発行日 * 2022年6月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

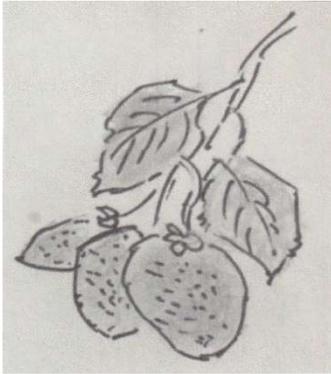
〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

たかをくくるな！おうちやくをするな！



自宅の近くに出来た工事現場の垂れ幕に書かれている。幾度も見ているうちに妙に心に訴えてくる。誰もが知っているが、日々の生活の中でおろそかになっている言葉だ。私自身もいろいろな言い訳を考えながら適当にやり過ごしてきたのが偽りのない我が人生だ。

他人を小ばかにし、楽しんですまそうとあれやこれやと考えてばかりきた。わたしは、何も悪くない。他人より少しは出来る方だから、少しぐらい手を抜いてもじゅうぶん人並みにはしてこれたはずだ。怠けている奴が多い中で自分はよくがんばっていると思っている。亡くなった母も私に、お前は120%がんばって生きてきたと褒めてくれた。

しかし、垂れ幕を見るたびに、はたして本当に自分は頑張ってきたのだろうか疑問に感じるようになった。自分程度のがんばりは誰もが毎日して生きている。作業現場で働くたび職人を見ていると涙が出そうになるぐらい彼らは猛烈に働いている。ある時、鳶の頭が「なんでこんな苦しい事をせなあかんのや」とつぶやいたのを聞いて彼の心中を察して胸が詰まった。

多くの作業員を見てきて、これまでの自分の生き方が甘すぎたのではないかと自問自答する。確かに自分なりに相当頑張ってきたつもりだが、それは狭い世界の中でのことだったように思える。退院以来お世話になっているDrが研修医だったころ、3時間ほど寝るだけで毎日研究に没頭している研究医がいた。自分はまねが出来なかったが、世の中にはおそろしく賢くてバイタリティーのある奴がいる、と言われた。

同僚がうわさする仕事の出来る人とは、職場へ早く行き準備を怠らず後片付けもする一番長く職場にいる人だった。仲間内では評判はいまひとつでも、めげずに続ける。どこの現場へ行っても職長はすぐわかる。一番よく動き一番ながく職場にいる人だ。

死をめぐるあれやこれ(91) 石川 吾郎

「黄金の三年間」で日本はどうなる？

最近こここで囁かれる「黄金の三年」をご存じだろうか。残念ながら国民にとっての、ではなく政権与党にとっての「黄金の三年」だ。七月の参院選で大勝すれば政権にとって今後三年は国政選挙がなく、ほぼ好き勝手にできる黄金の三年が手に入るのだ。◆岸田首相は、新しい資本主義を唱えて首相になったが、その内容といえば国民の貯蓄を小口投資のNISAに誘導するというなんともお粗末。嵐のような値上げラッシュでも消費減税はせず、ガソリン税も据え置き、国民の生活を守るまともな経済政策を打とうとしない。善人顔をしていても国民をいじめる鬼のような政策ばかり。これで七月の参院選で与党勢力が大勝したらどうなるか。国の財政がもたないと偽の口実で消費税の強行もしかねない。さらに恐ろしいのは憲法改悪を強行する可能性が高い。◆改憲勢力は、自公の与党に翼賛党と化した維新に国民民主が参院の三分の二の議席を取ると、衆院はすでにこれを達成しているの、改憲に踏み出し再び軍国への道へ歩みだす。◆メディアは選挙の一月前になっても沈黙して、まともな選挙を取り上げるものは少ない。さすがに報道の自由度七十一位の国の報道。ひたすら国民の目を政治から逸らすように見える。◆七月の参院選挙は、その結果が日本の未来を確実に変える選挙になる。日本の歴史を変えるために、ぜひ身近な人たちとともに選挙に行こう。無関心は未来への罪・・・

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 91	石川吾郎	1
素老人☆よもた帳 99	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 49	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 55	下村嘉明	4
新型コロナウィルス愚考 (26)	明石幸次郎	5
オクラの山たより 69	因了生	6
隠された歴史 44	満田正賢	10
プロバガンダに騙されるな		
―学び直そう戦争と憲法の歴史 成瀬和之		12
俳句	土田裕	14
編集後記	影山武司	14
	S K 生	14
ふみの道草 48	山椒魚	15

素老人☆よもた帳 (99)

坂本一光

◆学びの道は遠けれど

立命館大学寮歌

(前口上)

大路上鴨 集い歩きし宮人の

春菜摘みつ

美しき鴨の流の育てはぐくみし

出町南北寮

学びては思わざれば即ち

(全員で「くらし」)

思いて学ばざれば即ち

(全員で「あやうし」)

衣笠 吉田の山並みも

霞にぬれて花とさく

いざ、歌わんかな立命館大学寮歌

1 (Eins) 2 (Zwei) 3 (Drei)

(寮歌)

一、夕月淡く梨花白く

春宵(しゅんしょう) 花の香をこめて

都塵(とじん) 治まる一時や

眉若き子等相集い

希望の光を一にして

厚き四年を契りたり

厚き四年を契りたり

二、柴扉(さいひ)を排せば暁に

君は川流(せんりゅう) 我は薪(まき)

他郷憂(う)しと云うなかれ

椎の葉陰に相倚(より)りて

手を取り友と語らえば

春は四年に尽きぬべし

春は四年に尽きぬべし

三、秋陽落ちて野は寒く

たどる帰り路暗くとも

我待つ寮の灯は赤く

朔風天にどよむとも

来る日思えばあかあかと

希望は燃ゆる胸の灯や

希望は燃ゆる胸の灯や

四、学びの道は遠けれど

暮るるに早き春の日や

春風秋雨巡り来て

今此の丘を去らんとす

ああ我が友よ我が丘よ

いつかえりみんな思い出ぞ

いつかえりみんな思い出ぞ

「学びの道は遠けれど 暮るるに早き

春の日や」― その昔、立命に学ぶ友ら

が歌っていた寮歌をふと口ずさんでいる

と、かつて大学で働いていた頃のことを

思い出した。今はずいぶん変わったであ

ろうが、かつて高校から大学へ、生徒か

ら学生への過程に関わって、高大接続教

育が問われていた頃のことである。高校

生が大学生になる道のりは、今も昔も遠

い。それはなぜかが問題の根底にあった。

進学を考えると、一方に、その経済

的負担をどうするかという個人に課せら

れた現実的な問題がある。他方には、大

学を卒業した者を社会は必ずしも正当に

評価し受け入れていないという問題があ

る。いずれも、学びを萎縮させる現実的

な問題である。しかも、これらの問題は

今ではあまりにも深刻化しており、いわ

ゆる勉強のできる者にもできない者にも

「十五で世の中を分かちまったような」

(阿木燿子作詞、NHK大河ドラマ『獅

子の時代』テーマソング、一九八〇年)

さめた社会観、時代に対する閉塞感が広

がっているように見える。しかし、この

こと自体は今に始まったことではない。

少なくとも六〇年代半ば以降、大学の

大衆化に伴って一貫して存在していた外形

的な問題に過ぎない。外形的な問題であ

れば、それがどんなに深刻であろうと、

高校生が大学生になる道のりが今も昔も

遠いことを説明しないであろう。

それでは、この道のりが今も昔も遠い

のはなぜであろうか。能天気な考えとい

われるかもしれないが、「学ぶとはどうい

うことか、それはなぜ必要か」を誰も教

えてくれず、したがって「腑に落ちてい

ない」からだ、と私は思う。人間は、学

ばなければ自分になることはできない。

大学生になる道のりと言ったが、それは、

一人ひとりが自分になるために主体的に

学び、生きることができるようになる道

のりである。だから、春になると、希望

に燃える新入生を迎えて大学の一員とし

てともに歩き始めたいと願い、大学で何

に会い何を学ぶかに寄せてこんなメッセ

ージを送り続けて来た。

「学ぶとは、自然・社会・歴史・文化

など人間が生きてきた世界はどうなっ

ているかを問い、知ることです。そして、

それを問うことは、人間が生きてきたこ

の世界に自分はどう生きるかと問うこと

に重なるでしょう。

学ぶとは、人間が生きてきた世界とそ

の世界に生きる自分自身を知ることです。

そのとき、大切なことがあります。「人は

知らないものを深く愛することができる、

しかし愛さないものを深く知ることはできない」ということです。だから、人と社会、自然を、また自分自身を好きになつてください。無条件に好きになるのはありません。そこにどんな問題があり何が起きているか、理想や願いと現実は何がどこでどうずれているか、現実を理想や願いに近づけるために解決しなければならぬ課題は何か、解決への方法と道筋は明確になっているか。何かを学び知るときに、こういったことによく目を向けてください。

考えてほしい大切なことは、もうひとつあります。「人間はいつ自分になるか」ということです。こう問いかけたある哲学者は、自分になるとは、「社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決める」ことだと続け、人間は人と社会との関わりの中で「自分」になる、そのとき「人が生まれる」と言いました。現実の世界は、それを正しく知り理解すれば、ものの見方・考え方を根底から変えるような力を持っています。だから、皆さんは、所属する学部・学科・課程等の専門に関する学習においても、また、皆さん自身が行う自主的な活動においても、意識して、人と社会、自然に目を向け、現実の世界に学んでください。そして、理想や願い、自分らしい志を掲げ続けてください。そうすれば、皆さんは、一人ひとり異なる、個性的な「自分」にきつとなります。君が変われば世界は

変わる、変わるために知る、知るために変わる—そういうこともあるのです。」

高校生が大学生になるとはどういうことか。教育の現場で、高校教員として、また大学教員として、教員は何を願い、どんな思いで生徒や学生に向き合っているか。生徒や学生が抱えている問題は何か。そこある教育の課題を解決するため何ができるか。高校も大学もすっかり変貌したが、根底にある問題は変わっていないと思う。

あれから、高校教員と大学教員は互いの壁を越える新しい一歩を踏み出したのだろうか。それにしても今改めて思うのは、教育の現場に立つ者たちは、その一歩がなぜ踏み出せなかったかと思うほど、実は互いに近い所にいるということである。(かたちは心であり、心はかたちになる)

■大分の素老人



「哲学命い」の時事放談(49)

祖蔵 哲

『善と悪…二項対立の哲学』

マスメディアによるウクライナ問題の報道は日々絶えることはない。つい最近までは長く新型コロナの話題が日々の定番ニュースであったが今はこれに代わっている。そのおかげでミャンマーやスリランカの政情異変の報道が影に隠れている。世界ではウクライナ以外、西欧社会以外にも数多くの対処すべき問題はあるのに。

知られるように、ウクライナは西欧でなく東欧、東ヨーロッパに位置する。ウクライナ侵攻は本年2月24日に開始されそれが開戦になったが、しかし戦争はそれ以前から始まっていたのである。遅ればせながらこの度初めてロシア、ウクライナの歴史を学んでみてわかったことである。学校で学ぶ歴史は古代から始まり中世、近代で終わってしまうが、本当に学ぶべきは近現代史であろう。なぜなら、「近代」はまだおわっていないのである。その意味からもこの戦争は「近代」という枠のなかの戦争の一形態である。「現代」はまだ「近代」から脱しきれないものである。「近代」とは、文字どおりには「現代」に近い時代のことであるが、これは「近代」が終わったことを意味しない。

(1) 近代とはなにか。

まず、「近代」という概念が西欧中心の歴史観であることが最大の問題である。それは15〜16世紀以降西欧でのルネサンス、大航海時代、宗教改革、産業革命を経て、産業資本主義の発達と共に近代化の起動力になった。その思想は「個人主義」「自由主義」「合理主義」「進歩主義」である。これらの思想はあくまで西欧内で適応されることであり、西欧外は当てはまらない。そして「産業資本帝国主義」は非ヨーロッパ諸地域の支配、植民地化を促進した。この近代の枠組みを大きく揺るがしたのが唯物論哲学に基づくマルクス主義による「ソ連型社会主義体制」である。なぜロシアを中心とする国々がソビエト連邦を形成したのか、それはヨーロッパでもアジアでもないロシアのアイデンティティの問題に深く関係している。世界の中心である「西欧」へのあこがれと敵対でのアンビバレントな感情である。この意味からは満州事変にはじまる日本の「大東亜共栄圏」構想に基づく太平洋戦争も同じ構図である。第二次世界大戦後の「東西冷戦」「ソ連邦崩壊」は再びロシアのアイデンティティを揺るがしていた。歴史家の中には第二次世界大戦後をもって近代の終わりという解釈があったが、このウクライナ戦争によって「近代」はまだ終わっていないということが証明された。

歴史から見る「近代」概念の最初は本来「フランス革命」による「人権意識」であったはずである。しかし、それはあくまで西欧人種、白人、キリスト教という枠内でのことであり、外面的な西欧的近代思考とは「中心と周辺」＝「善と悪」という構図によって中心を存続させようとする「二項対立」構造の世界観である。その証拠に今回の戦争での日本の立ち位置は「西側」に属している。すなわち「西側」である。

(2) ポストモダン…西欧近代「大きな物語」批判

現代という時代を、近代（モダン）が終わった後（ポスト）の時代として特徴づけようとする言葉として定義されるのがポストモダンという思想である。植民地主義のいきづまりや世界大戦後の厭世観から、人々に共通する大きな価値観が消失してしまった時代状況を指す。現代フランスの哲学者リオタールが提唱した概念である。近代においては「人間性と社会とは、理性と学問によって、真理と正義へ向かって進歩していく」「自由がますます広がり、人々は解放されていく」といった歴史の「大きな物語」が信じられていたが、情報が世界規模で流通し人々の価値観も多様化した現在、そのような一方への歴史の進歩を信ずる者はいなくなつたとされる。また、ポストモダンという言葉は、ポスト構造主義の思

想傾向を指す言葉としても用いられる。構造主義は植民地での文化人類学の研究課程で提唱され、世界中地域が異なつていても人間の思考には構造的な共通性があるという思想である。そのような唯一の真理をどこかに求めようとする思考を徹底的に批判しようとしたのが同じくフランスの哲学者ジャック・デリダで、彼は「脱構築」というキーワードで世界の「二項対立」という「大きな物語」構造を批判した。

(3) 大きな物語「二項対立」

教訓的な神話や物語は必ず「善と悪」という構図であらわされ「勸善懲悪」というお決まりのストーリーが用意されている。

デリダによれば、古代ギリシア以降の「ロゴス（ことば＝理性）」の基に打ち立てられた西欧形而上学は、「善／悪」、「主観／客観」、「内部／外部」、「同一性／差異」、「人間／動物」、「パロール（音声言語）／エクリチュール（文字言語）」などの、前項が後項に対して優位を占める正反対の概念の二項対立性で構築されてきた。哲学の仕事とはこれらの階層的二項対立を解体し乗り越えること、つまり西欧形而上学を脱構築することであるという。

「二項対立」は対象を二分するための「軸」が必要になる。それが「価値基準」である。人間の頭が良い、悪いは「試験

の点数」という「基準」に対しての判断である。このような「基準」を捨てるとというのが「脱構築」である。

(4) 軸を捨てる、相対主義へ

ポストモダンは共通の「軸を捨てる」、「個人個人好き勝手やればいいじゃないか」という発想でさらに個人主義を徹底していった。つまり統一的、基準的な「絶対」はない、すべて「相対的」だという「相対主義」の方向に舵を切つていった。

相対主義とは「絶対的な真理はありえない」と主張する立場。この立場の否定である絶対主義に相対主義を適用すると、これも正しいことになるので、相対主義はこのままの形では整合的に維持することはむずかしい。これが相対主義のパラドクスである。例の『クレタ人のパラドクス』と同じ「自己言及の矛盾」である。このコラムでは何度も説明した。

相対主義の論理の核は、善悪、正しさも相対的なものにすぎず、その根拠などはどこにもない、という点にある。しかしそうなれば、その究極の帰結は、善悪や正義・不正義を決めるのは、「力」の強いものだということにならざるを得ない。「弱肉強食」の世界である。

現在、世界が絶対軸を捨てた結果、その維持が難しい無法地帯の相対主義的状态に停滞している。その隙間に割り込ん

できているのが非西欧のロシアである。逆に言えば「西欧」はこの「軸」を捨てられないのかも。西欧とはこの「軸」その物で成り立っていたのではないかと思われる。この戦争は西欧に最も近いロシアによつてもたらされた脅威であつたからこそ「西欧」は真剣にその「思想」の脆弱さを再認識したし、現にその戦争を止める術を持てなかつた反省を始めていると思われる。いや、まだ気が付いていないかもしれない。非西洋ロシアの後には、非西洋中国も控えている。「近代世界」は歴史に何を学んだのであろうか。

大峯奥駈道 (55)

体験型人間学 5

下村 嘉明

毎日、多くの人と出会いながらも、出会った人の想いを察することを人は意外と少ないことに私は人間の持つ表面的な思考というか、時間的な制約もあるのだからが物事を単純に判別し処理していかうとする思考が潜んでいるように思う。あまりにも多くの人がいるのでやむを得ない面もあるが、この志向は人間を持つ奥深き尊さをないがしろにする危険

性をはらんでいると私は危惧する。

我々は、物事を早く合理的に処理をし、人や物の流通を通して金儲けをするシステムから抜けきれないところか、ますますスピードを上げ無限大の金儲けをたくさんでいるようにすら思える昨今である。そういう、誰かの陰謀とまでは言わないが、この社会システムの中で実は見落としてはいけない事実がある。それは、黙々と働く人たちである。彼らは、実に人間的であり情緒的にも豊かで長い経歴は、いろいろな体験で満ち溢れ少しの紙面で語れるようなものではない。ひとりの人生は、大きなドラマでありドキュメンタリーだ。

さまざまなエンターテイメントが作られたとしても、人間の持つ面白さにはおぼれない。人間とは想像を超えた面白さを持つて生きている。このことへの関心・認識が世界的な平和と深く関係していると私は考えている。たとえばこんな場面に遭遇したらどうだろうか。

昨日の仕事現場である。ガス管工事の後処理でおこなわれた道路工事である。いわゆるアスファルト舗装工事でおこなった警備の時であった。8名で工事現場周辺の交通止を行う仕事であった。朝礼で配置場所が決められ無線機を渡された。周辺は急な斜面の高級住宅地である。道が狭く入り組んでいて急だ。私も指定された配置場所に行くために急な道を息を切らせながら登った。登った三叉路に先

に登られた警備員がおられた。彼をみてびつくりした。腰が曲がり高齢だとわかる。急な坂を駆け落ちない心配するほどだ。

彼の服装をみると着古した感じがしたので、私よりも先輩警備員と推察した。しかし、その姿でどうして警備員を続けられておられるのか興味を持つと同時に仕事が出来るとか心配した。たぶん、リーダーである職長もその辺のところを察して、すぐに代わりの人をよこして休憩させ、私にも休憩を命じた。私は、彼と同じ場所に行き休憩した。一言二言話しかけたが話をしたくないのか、沈黙が続いた。休憩も終わって戻ると、無線で職長が年配の彼の配置場所を変更して一番うえのダンプの待機場所に移るように指示した。それで彼は、急な坂道を腰を折るように曲げてゆっくりゆっくり登って行った。100メートルほどの距離を時間をかけて登って行った。

ところが、無線機でやり取りする彼の声は凄く若々しくて、彼の姿からは想像できない声だった。どんな事情で働いておられるのか興味は尽きないが、もし彼と次回に会うことがあれば、無理のない聞き方をして彼の想いを聞きたい。

新型コロナウイルス禍愚考(その26)

明石 幸次郎

コロナウイルス感染の流行が3年目に入り、高齢者の大多数が2回目のワクチンを接種済みではあるが、高齢者の中では感染に対する意識の差が表れてきています。それは外に出て人と交わるか、一人でも出来るだけ家に籠らず外に出るタイプと、自分が感染すれば家人、医療機関に迷惑をかけると、感染を恐れて余程のことがない限り外に出ないタイプとに分かれてきているようです。どちらが高齢者として、正しい行動パターンかは、自己責任で選択をすればよいのであるが、家に籠るだけでは、運動不足から身体のリズムを崩し足腰が弱り、体力が衰え命を縮める場合もあるようです。

新型コロナウイルス感染者が中国で出たとニュースがあったが、大勢の中国人観光客が押し寄せていた2019年10月に毎年やっていた元居た会社のOB会を三宮で行った。出席者10名、平均年齢76歳位で、その中で最長老は93歳のSさんは、この会の重鎮で会社にいた時には事業を大きくした功労者でメンバーから一目を置かれている人であった。元々偉ぶったところがなく、しかも自分から喋らずに人の話をニコニコして「はっはっは！それは、面白いとか、良いこ

としてる」などと老人としては珍しく人の話をしっかりとよく聞き好々爺然とされていました。

出席者一人一人の近況を話した後、幹事を引き受けていた私が、「Sさん、私と東京でお仕事させて頂いたのは約20年前ですが、今年で93歳と言われましたがああのと風貌も余り変わられていませんね。お顔の肌も、失礼ですが頭皮も艶々されて、益々お元氣そうですね、何か元氣を維持される秘訣みたいなものがあるんですか？あれば、我々後輩に教えていただけませんか？」と行き成り尋ねた。Sさんは、「はっはっは！そうやね、皆さんにお話するような秘訣などと言う大層なものはないですが、ただ毎日食べて飲んで寝るだけで誰のお役にも立っていないただの老人です。まあ、敢えて言えば、これは現役の時から実践しているが、今は、短くなったが、朝、夕それぞれ三十分程、家から公園まで歩いて、そこで五分くらい自分で考えた独自の体操をしている。一つ目は、ギャンブルやね。競馬は20歳の学生のころから、淀の競馬場には京都からよく電車で通ってたなあ。かれこれ70年以上飽きずにやっている。今は、年取ったから元町とか、会社の近くの難波馬券売り場まで行けなくなつたので、東京にいる息子が88歳の米寿の祝いやと言ってパソコンを買ってくれて、パソコンで馬券が買えるから、場外馬券場に行かなくてもいいと言って操作の仕

方を教えてもらった。それでまだ競馬は続けている。まあ、これは便利やな。メールはやってないけどね。もう一つは麻雀やね。これは80年程やっているが、中々、上手くならんなあ。皆さんとも、仕事終わってから、会社の近くでよくやったもんなあ。まだこの年で会社のOB麻雀クラブに入り年二回の大会のは欠かさず出てるが、今年の春の大会で40人位参加して、初めてブービーになって本当に悔しくて堪らんわ。今月末に秋の大会があるが、せめて真ん中の成績を取りたいと思っている。さてどうなるもんか——はっはっはっは。三つ目は、酒やね。これがなかったら元気がでないね。

3年前までは、週に2, 3回は阪神電車の沿線の駅にぶらっと降りて飲み屋を探し、ここやと思つた店に入り銚子を二、三本とあてを三品ほど頼んで、その女将さんと喋り、気に行つたら又、その店に行く。毎回降りる駅を変えて飲み屋を探してぶらぶらしている。今は、毎晩、家で飲んでいるが、家内が酒のあてを作るのはしんどいということで、今は、私が作っている。この頃は買ひ物も私がするようになってます。四つ目は、男はいつまでも異性に興味を持つ、これは、女の人も同じだと思ふが、家に居て家内の顔を見てもしょうがない。外に出たら綺麗な女性にも出会えるし、飲み屋の女将も酒を飲んだら不思議と美人に見える。別に何もしないが、それだけでも楽

しい気分になるね。はっちはっは。こんなのは、皆さんの参考にならないけど、元気は自分の力で出すしかないし、何もしないで家に居るだけでは身体も頭も衰えて行くだけで、酒も同じやね。年取れば段々と飲む量が減っているし、酒が飲まれなくなつたら、まあ、命が尽きるということだと思つています。ちよつと、喋り過ぎたかなあ。申し訳ないなあ。皆さんとこうして、いるだけでも楽しい！今日は東京から四人も来られ、皆さんの顔を一年ぶりに見られてこんな嬉しいことはない。ありがとう！と話を終えた。

Sさんのこの話が結果的には、最後に聞いた話になってしまいました。

それは、去年末にSさんの奥さんからSが8月15日に老衰で95歳で亡くなつたとの喪中はがきをもらいました。奥さんから亡くなる前の状況を聞くと、二年前からコロナ感染騒ぎで、外に出て感染したら周りに迷惑が掛かるということで、外出も控え、況して飲み屋さんも開いておらず、家に籠りがちになり、体力と飲む量が減つて、酒がまずいと言いだして、お盆の8月14日にしんどいので休むと言つて横になつた。夕方呼吸が出来ないくらいしんどそうだったので救急車に病院に運んでもらつた。その翌日、偶々帰省していた息子に看取られて亡くなつたという事でした。

もしコロナ感染発生が起こっていなければ、Sさんは一〇〇歳までか、もつと

長生きをされたと思つたが、95歳まで元気で明るく、呆けずに、介護の手を煩わせずに見事に生きられ、大先輩として、自分達に生きるお手本を残してくれた方だと感謝しています。

オクラの山たより (69)

困生

一

中学生か高校生の頃、国語の時間で

鶏頭の 十四五本も ありぬべし

という正岡子規の俳句を習つたことがあつたという人は少なくないでしょう。失礼ながら多くの方はこの句の何がいいのか、よく分からないという感想を持ったのではないのでしょうか。「鶏頭が十四、

五本もあるに違いない」というほどの意味で、佳句だといわれても雲に包まれた気分になつたに違いありません。おそらく指導された先生は「いくたびも雪の深さをたずねけり」「糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな」という句や「いちのはつの花

咲き出でて 我が目には 今年ばかりの

春行かんとす」という歌を材料にして病に苦しんだ子規の人生を語ることでこの句の内容を教えられたことでしょう。その努力は十代半ばの生徒たちにどれほど届いたのか。たぶん、多くの生徒は「分からん」と頭をひねり、幾分か生徒は訳の分からぬまま教科書に載っているのだから名句に違いない、と心に留めたことでしょう。

この句は一九〇〇(明治三十三年)九月に子規庵で高浜虚子も含めた十九人で行われた句会に子規から出された九句のうち的一句です。この九句には「堀低き田舎の家や葉鶏頭」「鶏頭の葉にとまりしばつたかな」「鶏頭や二度の野分につがなし」といった写実的な句が多いのですが、その中で唯一「鶏頭の十四五本もありぬべし」だけが実景の句とは違う抽象的な句でした。当日の句会ではこの句はほとんど評価されず、参加者十九名のうちで支持したのはわずかに二名。この句は子規の俳句仲間では評価されなかつたのです。

子規の死の七年後の一九〇九年、高浜虚子らによつて「子規句集」が編まれましたが、その中にはこの句は選ばれていません。この句が傑作だと主張したのは歌人たちの中でも斎藤茂吉は「この句は芭蕉も蕪村も追隨を許さぬ」ほどの傑作だと喧伝し、この句が「子規句集」に入られなかったことに強い不満を表明しました。しかし、その後も一九四一年に

刊行された「子規句集」（岩波文庫）でもこの句を入集させず驚くほどの頑迷さぶりを世に示しました。

こうした流れもあつて戦後になると、この句を否定する俳人と肯定する俳人とがさかんな「鶏頭論争」をくりひろげました。その後、一九五一年になって山本健吉がこの句は「子規の鮮やかな心象風景」を示しているという評価をだして一応の小康を得ました。

ただし、今でも鶏頭の句は正岡子規の人生を読み込まなければ理解できず作者名を消してしまうと末期を迎えつつある人の心の世界をとてもうかがうことはできない。その点では駄作であるとする説や群れて咲く鶏頭というものに「十四五本」というそれまでにない表現を与えたことがこの句の核心であり、この句が高く評価される根拠ではないかという説もあり、まだまだ十分な決着を見たというわけではありません。

二

師である正岡子規の鶏頭の句を頑なに拒否した高浜虚子ですが、観念的な句だから拒否したというわけでもなさそうです。虚子自身にも「去年今年（こぞことし）貫く棒の如きもの」という有名な句がありますから。結局のところ子規の句を拒否した理由は俳句に関しては素人の私にはよく分かりません。そうしたこと

よりも興味あるのは子規と虚子や碧梧桐などの門人たちとの師弟関係のありようや交流の様子です。しかし、残念ながら手元に簡便な資料もなくここで道を引き返すほかはありません。しかし、我らが蕪村についてはわずかながら資料もありますので、今少し話を続けます。

一七七〇（明和七）年三月、蕪村は十五歳で文台開きをおこない、俳諧宗匠夜半亭二世を襲名しました。宗匠となつた蕪村に一門内外の連句や発句に点をつけ、必要に応じて句評を記すという仕事ができました。それは宗匠としての責務であつた上に貴重な収入源でもありました。しかし、世間での蕪村の家業は画家です。しぜん画業を優先し評点・句評の活動にはどうしても消極的にならざるをえません。蕪村自身も「今日は今日の俳諧にして、あすは又あすの俳諧なり」（「桃李（ももすも）序」と書いたり「拙老（私）は…中略…俳諧はただ心の適するにしたがひ、昨日に今日は風調（「おもむき」の意も違ひ候を相樂しみ）」（一七七三（安永二）年十一月十三日付、暁台宛書簡）と書いています。心のおもむくままに昨日と今日とでは俳諧の風調も違つてくるのをむしろ喜びとして、その場きり、そのときどきでの詠みぶりを自在に変えていく。それが蕪村の流儀でした。蕪村の俳諧に対する意識はかなり気楽なものであつたともいえるので、門人との

接しようも他の俳諧専一の宗匠とは一味違つたものになつたのでしよう。そうはいつてもわずかに残された門人たちへの句評を見ていくと評点・句評という機会があれば、ごくふつうに感じるという基本的姿勢があつたことは十分に認められます。

この蕪村が門人たちの句にどのような評点・句評をしたかを示す資料に「蕪村句評」（「蕪村文集」岩波文庫2016年刊所収）があります。

その「蕪村句評」から「冬題点取集」の一部を紹介してみます。蕪村から句評をほどこされたのは百池、月居、月溪、維駒、自笑といういずれも蕪村の門人たち。出された季題に対して門人たちが句を出し蕪村が句評をした記録が「冬題点取集」です。蕪村の句評はかなり手厳しい。他の句評の機会では「古き案じ場なり（古い趣向の句だ）」とか「古くさし」とか「しほからき句（作意や理屈が目立つ句だ）」と辛くはありますが素っ気ない批評が多いのですが、この「冬題点取集」ではかなりきちんとした批評をしています。その理由は分かりません。厳しい批評をした例をいくつか紹介します。句の後にある言葉が蕪村の評言です。蕪村の口吻が聞こえてきそうで私には面白いです。

いうことか。「持ちて」といふこと、さりとは手づつなる言かな。こたつを持ち歩く様に聞こえ候。

「火燧」は「こたつ」、「人氣」は「じんき」とよみ「人のいる気配」のこと、「手づつ」は「拙劣な言葉、へたな表現」の意です。「持ちて」の語がまづいと蕪村は指摘しています。こたつを持って歩いているようで変だというわけです。

② 炉に寄るや 我れ若き事二十年

一句、とかく聞こえず候。「我れ若き事二十年」と、誰に対して云いたるにや。さりとはいかめしき言葉。解けず。

「一句、とかく聞こえず候」とは「ともかく一句の意味が理解しがたい」という意であり「さりとはいかめしき言葉。解けず」とは「それにしてもこの大仰な言葉遣いは不可解だ」という意です。そばにいた老人に対して自分は「若き事二十年」といつているのでしょうか。はて、どういった心持ちでいつているのか。蕪村のいうとおりの意味のとりにくい句です。

③ こがらしに 箕面の滝の ゆがみ哉

「煙りかな」とも有りたし箕面の滝、こがらしなどにゆがむ様なるものにあらず。数十丈の滝の曲（まがり）

なり。さならばおかしきもの成るべし。
これらは、句曲りを求めんとして、かえ
って拙(つたな)し。

「『煙りかな』とも有りたし」と句の前
にあるのは句末の「ゆがみ哉」の蕪村に
よる改作案。箕面の滝は大府箕面市に
ある滝で落差三十三メートル。紅葉の名
所です。「さならばおかしきもの成るべ
し」とは、木枯しで落差三十三メー
ルの滝がグニャグニャと本当に曲がった
らきつと面白い情景になるだろう、とは蕪
村の皮肉です。「句曲り」は「句作りで意
外な趣向を探ろうとする」こと。そんな
ことを求めようとするとかえってマズイ
句になりますよ、という蕪村のアドバイ
スでもあります。

④ やせ腕の 美人あやまつ 茎の石
美人と云ふ字を下す事、なかなか容易の
ことにあらず。香の物などを出だす婦人
を、美人と使ふことは大いにわろし。

「茎」とは「大根やカブラを葉や茎と
もに塩漬けにしたもの」のことで「茎の
石」とは「漬け物石」のことです。「美
人」という語は世塵にまみれた女性に用
いるにはふさわしくない語だといってい
ます。漬け物を容器の中から出そうとし
ている婦人に対して「美人」を使うのは
どうか、というわけです。

「美人」を用いた蕪村の句に「青梅に

眉あつめたる美人かな」があります。古
代中国の越の美女西施が胸を病んで眉を
ひそめていたのを、美人はかくあるべし、
と宮中の女性たちがその様子をまねたと
いう故事からできた句です。確かに漬け
物石を取り損なつた婦人よりは、「青梅
に……」のほうが「美人」の語とよくマ
ツチしています。

⑤ 寒菊や 酒にはならぬ 在り所
酒になるならぬと云ふは、俗中の俗な
り。

「寒菊」は「冬菊」「霜菊」ともいつて
冬に小さな黄色の花を咲かせる野菊の一
種です。水原秋桜子に「冬菊のまとふは
おのが光のみ」という有名な句がありま
す。寒菊ではとても酒を飲む気にはなれ
ぬという内容に対して蕪村は寒菊では酒
を飲む気になる、ならぬなどと考えるの
は俗物中の俗物だと厳しく批判していま
す。

以上のようなきちんと批評を加えた句
ばかりではなく「冬題点取集」には他の
句評と同じく素っ気ない評をした句もあ
ります。もはやあれこれと言う気にもな
らないのでしょうか。

⑥ 茎の香や 朝めし急ぐ 旅の人
よろしからぬ句なり。

⑦ 寒菊や 秋風が庭の 垣根越し

さんさんの句なり。

⑧ 我が友と 蒲団奪(ばい) 合ふ 旅寝か
な
古し古し。

⑨ 玉子酒 内儀が下戸を 恨みけり
悪句 悪句。

⑥から⑨への句はいずれも今一つの句と
いわれてもしかたのない作でしょう。蕪
村のいうとおりです。⑦の句は内容が陳
腐である上に「寒菊」は冬の季語で「秋
風」は秋の季語です。季重なりとなる必
然性もなく「散々の句」と蕪村がいうの
ももつともでしょう。

どの句評も手厳しいものですが、最も強
烈なのは、この「冬題点取集」の末尾に
ある蕪村の言葉です。「どの句もおもし
ろくない」と言いきつた上で次のように
いっています。

所詮かやうのことにては俳諧になり
がたく候。なかなか止めになされて候
ふてもしかるべく候。かやうの句を見
候へば、癩癩(かんしゃく)が起こり候。

「つまるところ、こんなできの悪い句ば
かりを詠んでいるようでは、よい俳諧を
詠むことなどはむずかしい。いっそのこ
と俳諧など止(や)めたほうがいいのでは

ないか。(あなたたちの)こんな句を読
んでいると癩癩(かんしゃく)を起こしそうです」とい
う蕪村の言葉は強烈です。想像することに
んな下手な句ばかり詠んで何ということ
だと蕪村は本気になって怒っていたのか
もしれません。

それにしても師の厳しい言葉を含めて
門人たちが何故この「冬題点取集」を後
世に残したのか。推理することはあれこ
れとできますが、唯一言えるのは、この
文書を残し伝えた門人たちが師を敬慕す
る気持ちをよくみ取ることは可能であろ
うということです。

三

正岡子規が「鶏頭の……」の句で門人
たちからの評価がなかなか定まらなかつ
たように蕪村もまたそのような憂き目に
あっています。有名なものでは高校の教
科書にも載っている「春風馬堤曲」。こ
の作品は蕪村畢生の傑作と評価されるだ
けではなく、同時代の作品には見られな
い近代的な性格もあり明治以降の近代詩
一般の中においても今なお特異な位置を
しめるものだと評価されています。

「春風馬堤曲」は全三十二行、十八首
から成っています。発句あり、漢詩あり、
漢文訓読体あり、自由な和文体ありと変
幻自在に多種多様な文学形式を混在させ
た作品(「俳詩」と呼ばれるジャンルの
作品)です。内容は娘さんが奉公先から

休暇をもらって実家に帰るみちのりを描いたものです。春風の中、蕪村の故郷である毛馬の堤へと向う「道行き」を一種の芝居の数場面のように描いた作品です。

「春風馬堤曲」が世に出たのは蕪村六十二歳、一七七七（安永六）年刊の春興帖「夜半楽」によってですが、この春興帖は作者周辺のごく限られた知己にしか配布されませんでした。たとえ読者がわずかであっても、これほどの作品に当時の人々の間で何らかの反応があつてしかるべきだと思うのですが、門人たちも含めてこの作品に対する同時代の人による評価・言及があつたかどうか、今のところそれを示す資料はありません。蕪村がこの作品と同類の「俳詩」の制作を以後続けなかつたのは、おそらく手応えのある反響が乏しかったせいではあるまいか、と憶測したくなるほどです。古今東西を問わず文芸に携わる人はしばしば読者によって励まされ後押しされて創作活動を続けるものですから。

なぜ門人も含めた当時の人は「春風馬堤曲」の評価を書き残さなかつたのでしょうか。なんの資料もないので想像するしかありませんが、参考になる資料はありません。実を言えば蕪村の俳諧をあれほど称賛した正岡子規も「春風馬堤曲」に否定的でした。子規は「俳人蕪村」（一八九九（明治三十二）年刊）で「『春風馬堤曲』とは俳句やら漢詩やら何やら交ぜこ

四

ぜにものしたる蕪村の長編」と注目していますが、けつして肯定的ではなく、紀行的韻文とも見るべく諸体混淆せる叙情詩とも見るべし。惜しいかな。蕪村はこれを一篇の長歌となして新体詩の源を開くあたはざりし」と、異種の文体の併用という蕪村の試みを否定的にし認めませんでした。

実験的とも革新的とも言える異種混交の文体を持った「春風馬堤曲」を前にしてどう評するか、門人・知人たちは困惑したのではないのか。そんなふうには想像していません。

「春風馬堤曲」を現在のように積極的に評価したのは佐藤紅緑が最初です。子規の「俳人蕪村」が刊行されて五年後「蕪村俳句評釈」で次のように述べています。

字句の精練着想の清新、一字一句として無駄のなき所は今日の詩家といえども企及すべからざる点がある。この作を読んで彼の俳句と比較し見れば実に蕪村の詩想豊饒、而してあくまでも美術的文学的なるに驚かぬものはなからう。

現代の我々とほぼ同じような評価をしていると言えるでしょう。

宗匠とその門人とがどれほど親密に交流したとしても時代を超えた師の作品に對して後世の人も納得するような評価をすることは難しいことのようにです。

蕪村が自分の作品を門人たちに理解されなかつたことは珍しいことではありませんでした。その理由としてよく言われるのは蕪村には古典趣味があり、それを踏まえて彼の句には二重構造を持つものが多いということです。たとえば次の句です。

鮒ずしや 彦根の城に 雲かかる

「鮒ずし」は近江の名産で飯と鮒とを交互に重ねて自然発酵させた「馴鮒（なれずし）」で酸味と臭味が強い鮓です。私は苦手ですが関西の辛党には愛好者が多い食品です。「彦根の城」はもちろん井伊家三十五万石の居城で今も彦根駅から国宝の天守閣を望むことができます。

この句は琵琶湖畔の茶店で名産の鮒鮓を食しつつ眺めると青く澄んだ空に先ほどまでなかつた一片の雲が彦根城の肩にかかっている、といった内容で爽やかさのある旅情の句と一般には理解されています。しかし、蕪村のねらいはそれとは全く別なところにあつたらしいのです。兵庫に移つたばかりの太魯宛てた手紙（一七七七（安永六）年五月十七日付）に

この句解すべく解すべからざるものに候。とかく聞きうる人まれにて、ただ几董のみ微笑（みしょう）いたし候。

「この句は理解しやすそうで完全な理解とはいかぬようで、句の内容を正確に理解できた人はほとんどいませんでした」といっています。しかし、几董ただ一人だけがニコツと微笑んで合図してくれただけで、と付け加えています。

さて几董はどんな内容をこの句から読み取って微笑したのでしょうか。

この中で句の理解のカギとなる語は「雲」です。「雲」といえば「雨」。合わせて「雲雨」という漢語はこの時代の漢詩文に通じた文人には「ああ、あれか」とすぐに理解される語でした。それも「朝雲暮雨」という故事成語によって理解されていた語でした。この語の由来は「文選」第十九にある宋玉「高唐譜」です。その話とは、楚の襄王が雲夢の台に遊んだとき高殿のうえに雲気が立ちのぼるのを見て不審に思いました。お側に控えている者が「あれが朝雲といふものです」とこたえ先王が見た夢の話語りしました。さきの王様が夢の中で美女と会つて契りをむすばれ、女は後朝（きぎぎぬ）の別れに際してこのように言いました。「私は巫山にすむ者で朝に雲となり夕べには雨となつてあなたにお逢いすることでしょう」と。「朝雲暮雨」はこの女性の言葉からできた語でした。すなわち「雲雨」は中国の古典では男女の恋のシンボルなのです。几董は蕪村の一見さわやかな情景を詠んだ句の背後にある「恋」または

「男女の交情」という主題を理解して微笑したに違いありません。

表面上の爽やかな旅情の句という意味と故事をふまえた上での意味という二重の構造を持つ句を正確にとらえることは蕪村の門人らにも難しいことだったでしょう。作る側である蕪村にとっても二重構造の句作りは、裏の意味を潜めすぎるとそれが見なくなり、露わすぎては面白くないという難しさがありません。「鮒ずしや……」はそのまねな成功例というべきでしょう。

隠された歴史(44)

満田 正賢

今回は、「隠された歴史(3)」などで何度か取上げたことのある伊吉連博徳(いきのむらじはかと)書について、改めて考察してみたいと思います。伊吉連博徳書は、日本書紀の斉明紀に引用されている、遣唐使の動向に関する伊吉連博徳の報告書です。又、孝徳紀には「伊吉博得言」という別の表現で引用されています。伊吉連博徳書は、その内容が九州王朝の存在を証明するものとして、古田武彦氏の「失われた九州王朝」以下多

くの研究が為されてきました。

日本書紀が引用した伊吉連博徳書の記事は、斉明紀五・六・七条に引用された、庚申(斉明五年)、辛酉(斉明六年)の記事です。又、孝徳紀白雉五年条には「伊吉博得言」という表現で庚寅(持統四年)、乙丑(天智四年)の記事が引用されています。白村江の敗戦(天智二年・六六三年)前後の遣唐使の状態が記されており、そこに記された伊吉連博徳グループと「倭種」グループとの対立、唐の処遇が記されています。参考までに、末尾に日本書紀に引用された伊吉連博徳書の原文を附記しましたので、興味を持たれましたらぜひとも一読ください。古田武彦氏は「失われた九州王朝」において、「倭種」を初めて史書に現れた九州王朝の使節団のメンバーと見做し、伊吉連博徳書を白村江前後の唐における九州王朝の使節団と近畿天皇家グループとの対立を知る直接史料と考えました。

伊吉連博徳書を考察する上での第一の問題は、それがいつ誰に提出されたものかということです。この問題に対し、日本古典文学大系版日本書紀の補注では次の説が紹介されています。

①老岐史が連姓を与えられたのは天武十二年であり、伊吉連博徳書の提出は天武十二年以降である。(＊持統朱鳥元年記事には「小山下壹伎連博徳」と記されています)

②白雉五年条の伊吉博得言は伊吉連博徳書と別物である。

③斉明紀に引用された伊吉連博徳書は博徳が天武十二年以降書いたものである。白雉五年条に引用された「伊吉博得言」の帰国記事は白雉五年の出来事である。(坂本太郎説)

④斉明紀に引用された伊吉連博徳書は博徳が持統四〇九年に官界復帰の為に政府に提出したもので、白雉五年の伊吉連博徳言は書に附属する編年的記録である。

(北村文治説)

⑤「伊吉博得言」の引用文の最後に「今年共使人帰」という記載があります。この「今年」がいつを指すかについて、白雉五年説(坂本太郎)「今年」という言葉は、原本には「白雉五年」と書いてあったものを、書紀編者が行なった修

正とみなすと天智四年説(和田英松、北村文治)があるとしています。『使人』とは伊吉博得等であり、天智四年説が最も有力である」という北村文治氏の説を最後に紹介しています。

又、坂本太郎氏は「日本書紀と伊吉連博徳」で次のように考察しています。

①斉明五年条に出てくる「小錦下坂合部石布連、大山下津守吉祥連」の冠位は天智が制定した冠位である。

②伊吉連博徳書には伊吉連博徳自身の功

績が記されている。この事から、伊吉連博徳書は博徳が書紀編纂の材料として提出したものと推測出来る。

以上ご紹介したこれらの諸氏の考察を参考にして、私は次のように推定しました。

伊吉連博徳は大室元年(七〇一年)に従五位下に叙され、大室三年(七〇三年)に大宝律令選定の功労褒賞を受けています。没年は不明ですが、最終の位は従五位上となっており大宝三年以降も生存していたと思われます。養老四年(七二〇年)の書紀完成時に生存していたかどうかはわかりませんが、書紀編纂開始時に生存していた可能性は十分にありません。坂本太郎氏が推測したように、伊吉連博徳書は博徳が書紀編纂の指示が出された時に提出したものと考えて良いのではないかと思います。

白雉五年の「伊吉博得言」の引用

文には「連」という姓が記されています。仮に日本書紀・孝徳紀の述者が白雉期の生き証人として伊吉連博徳から直接ヒアリングして記載したものとすると、「連」という姓が抜けていることは不自然です。一方で、「伊吉博得言」の引用文には伊吉氏が連姓を得た天武十二年以降の庚寅(持統四年)と、乙丑(天智四年)という年が記されています。この矛盾に答えなければなりません。

「伊吉博得言」の引用文の最後に

ある「今年共使人帰」の「今年」がいつを指すかについて、私は「今年」は天智四年であると考えます。「今年」帰国したと博徳が記した氷連老人は、持統三年の大伴部博麻の記事（※自らが犠牲になって土師連富村・氷連老・筑紫君薩夜麻・弓削連元寶兒の四人を帰国させたという記事）によって、白村江の後帰国したと推定出来ます。別倭種韓智興も同様です。坂本太郎氏は、この時期何度も唐を往復した人間がいてもおかしくないといいますが、学生である氷連老人だけでなく、韓智興も伊吉連博徳も同時期に唐と日本（倭国）を往復したとは考えにくいことです。「伊吉博徳言」において日本書紀編者が「修正Ⅱ加筆」したのは、坂本太郎氏が推測した「今年」という表現ではなく、伊吉連博徳が連姓を得た天武十二年以降の「智宗以庚寅年付新羅船歸」という記事と、天智四年と重なる「定恵以乙丑年付劉德高等船歸」という記事であろうと考えます。

「伊吉博徳言」の「今年」が天智

四年であるとする、伊吉連博徳はまだ連姓を得る前の天智四年に天智天皇（正式には即位前の中大兄皇子）に帰国報告を行ない、それが記録として残っていたと考える事ができます。「伊吉博徳言」は本来「伊吉史博徳言」であったと思われる。書紀編者は、伊吉連博徳書が存在することから、あえて「史」という姓を削ったのではないのでしょうか。孝徳紀白

雉五年の「伊吉博徳言」の主要部分は、

伊吉連博徳書とは異なるものであり、伊吉史博徳が中大兄皇子に提出した帰国報告書の中の一文であったと考えられます。

第二の問題は、伊吉連博徳は純粋に事実を書き留めた記録だったかどうかということ。この問題に関して、坂本太郎氏は前出の「日本書紀と伊吉連博徳」の中で次のような考察を行なっています。

①舒明四年（六三二年）に高表仁が

難波津に泊まったときの接待係

として伊伎史乙等（おと）という

名が出てくる。新撰姓氏録には伊

吉氏は、長安の人劉家揚雍の後で

であると記している。伊伎史氏は少

なくとも舒明期以降对中国外交

に携わっていた。

②最後に天譴（てんけん）のあったこと

（※「大倭天報之近」という記事を指

す）を述べているのは、それがこの報

告書の執筆の少なくとも一つの目的

であったことを示している。

③博徳言は、博徳書に対し、補足的な意

味を持ったものとして、博徳書とあま

り隔たぬころに記されたものである

。博徳書で問題の韓智興を特に別倭

種と説明しているところが、両者の無

関係でないことを思わせるのである。

博徳書について考えた博徳と書紀と

の関係の大本は、またこの博徳言につ

いても通用すると見てよいと私（※坂

本）は考える。

この坂本太郎氏の推定に対し、私は、
斉明紀五・六・七年条に引用された、庚

申年、辛酉年の記事は、伊吉連博徳書が

日本書紀編纂を意識して作成した報告者

であるならば、「事実を、日本書紀編纂に

よる歴史創作の方針に沿った内容に粉飾

して記した報告書である」と考えること

が出来るのではないかと考えます。例え

ば「天子相見問訊之、日本國天皇平安以

不」など、あたかもこの時点で唐の天子

が日本国天皇に対応しているが如き表現

は、また唐が「日本国」ではなく「倭国」

と交流している時期であることから、明

らかに粉飾されたものと考えます。

伊吉連博徳書の中でポイントとなる

記事を孝徳紀白雉五年条の「伊吉博徳

言」のそれとつなぎ合わせると次のよ

うになります。

「別倭種韓智興・趙元寶」↓「韓智興僂

人西漢大麻呂、枉讒我客。客等、獲

罪唐

朝已決流罪、前流智興於三千里之外、

客中有伊吉連博徳奏、因即免罪。」↓

「爲

智興僂人東漢草直足嶋所讒、使人等不

蒙寵命。使人等怨徹于上天之神、震

死足

嶋。時人稱曰、大倭天報之近。」

この一連の記事については、「隠された歴

史(3)」で「韓半島からきた倭国」の著者、李鐘恒氏の解釈を詳しくご紹介しましたが、私なりにまとめると、

「我々とは異なる」倭国の使節団が余計なことを話したので、唐朝は流罪を決めたが、私（※博徳）が申し立てをして流罪を免れることが出来た。又倭国の使節団が余計なことを話したので、使人（※博徳等）は唐の天子の寵命を受けることがなかった。大倭（※倭国）が天の報いを受ける日は近い」と解釈出来ます。

私は、伊吉連博徳が、唐における倭国から日本国への交代を推進した当事者として、精一杯自分の手柄を誇示したのが伊吉連博徳書ではなかったかと考えます。倭国から日本国への交代という史実は日本書紀では隠されていますが、博徳が自分の手柄を誇示するためには、それに触れざるをえなかったのではないのでしょうか。又、伊吉連博徳書は日本書紀編纂の為に提出されたと考えられますが、博徳は天智四年に中大兄皇子に提出した帰国報告書の中で、すでに上記の主旨を誇示していたと思われます。それ故に「伊吉博徳言」の中で「別倭種」という、日本書紀編纂上危険な言葉が用いられていたのではないのでしょうか。

「伊吉博徳言」の中にある「別倭種」という言葉は伊吉連博徳書の最後に使われた「大倭天報之近」という言葉と呼応しているように思えます。山田宗睦訳「原本現代訳日本書紀」では、「倭種」につい

ては、「日本人との混血児(古典文学大系) 説はとらない。倭国人の意」という注釈がついており、「大倭天報之近」については「この大倭を通説のように大和とすると文意が通じない。大倭すなわち倭国で、その天報は滅亡も近い(白村江の敗戦)」というのである。」という注釈がついています。山田氏は古田説に好意的ではありませんが、「原本現代訳日本書紀」の注釈で特別に古田説を紹介しているわけではありませぬ。山田氏があえて注釈でコメントしたように「別倭種」、「大倭」が白村江の敗戦を契機にして最終的に「日本国」近畿天皇家と王朝交代した「倭国」九州王朝を指していることは疑いがなないように思えます。

古田氏の「失われた九州王朝」においても、李鐘恒氏の「韓半島からきた倭国」においても、伊吉連博徳書と「伊吉博徳言」は貴重な同時代資料と見做してきましました。それに対し、私は上記の考察の結果、伊吉連博徳書が日本書紀編纂の為にまとめられた報告書であり、一方「倭種」という表現のある「伊吉博徳言」の主要部分は天智四年に伊吉史博得が中大兄に提出した帰国報告書であると推測しました。そういう仮説をもとに、白村江前後の日本の変化、九州王朝と中大兄の関係などを改めて検証することが必要ではないかと思えます。そして検証にあたっては、「伊吉博徳言」に「別倭種韓智興・趙元寶」という日本書紀本文に現れない人

物名が記されていることから推測出来ること、すなわち、「九州王朝の実態はすべて日本書紀の中に隠されているわけではない。大半の部分は全く記されていない。」という視点を持つことが必要であると考えます。

*参考・日本書紀に引用された伊吉連博徳書の原文

―白雉五年記事―

伊吉博得言「學問僧惠妙於唐死、知聰於海死、智國於海死、智宗以庚寅年付新羅船歸、覺勝於唐死、義通於海死、定惠以乙丑年付劉德高等船歸。妙位・法勝・學生氷連老人・高黃金并十二人・別倭種韓智興・趙元寶、今年共使人歸。」

―齊明五年記事―

伊吉連博徳書曰「同天皇之世、小錦下坂合部石布連・大山下津守吉祥連等二船、奉使吳唐之路。以己未年七月三日發自難波三津之浦、八月十一日發自筑紫大津之浦。九月十三日行到百濟南畔之嶋、嶋名毋分明。以十四日寅時、二船相從放出大海。十五日日入之時、石布連船、横遭逆風漂到南海之嶋、嶋名爾加委。仍爲嶋人所滅、便東漢長直阿利麻・坂合部連稻積等五人、盜乘嶋人之船、逃到括州。州縣官人、送到洛陽之京。十六日夜半之時、吉祥連船、行到越州會稽縣須岸山。東北風、風太急。廿二日行到餘姚縣、所乘大船及諸調度之物、留着彼處。潤十月一日

行到越州之底。十五日乘驛入京。廿九日馳到東京、天子在東京。卅日、天子相見問訊之、日本國天皇並平安以不。使人謹答、

天地合德、自得平安。天子問曰、執事卿等好在以不。使人謹答、天皇憐重亦得好在。天子問曰、國內平不。使人謹答、治

稱天地萬民無事。天子問曰、此等蝦夷國有何方。使人謹答、國有東北。天子問曰、

蝦夷幾種。使人謹答、類有三種。遠者名都加留、次者鹿蝦夷、近者名熟蝦夷。今

此熟蝦夷每歲入貢本國之朝。天子問曰、其國有五穀。使人謹答、無之。食肉存活。

天子問曰、國有屋舍。使人謹答、無之。深山之中、止住樹本。天子重曰、朕見蝦

夷身面之異極理喜怪、使人遠來辛苦、退在館裏、後更相見。十一月一日朝有冬至

之會。會日亦觀、所朝諸蕃之中倭客最勝、後由出火之亂棄而不復檢。十二月三日、

韓智興僂人西漢大麻呂、枉護我客。客等獲罪唐朝已決流罪、前流智興於三千里之

外、客中有伊吉連博徳奏、因即免罪。事了之後、勅旨、國家來年必有海東之政、

汝等倭客不得東歸。遂匿西京幽置別處、閉戶防禁、不許東西、困苦經年。」

―齊明六年記事―

伊吉連博徳書云「庚申年八月百濟已平之後、九月十二日放客本國。十九日發自西京、十月十六日還到東京、始得相見阿利麻等五人。十一月一日、爲將軍蘇定方等所捉百濟王以下・太子隆等・諸王子十三人・大佐平沙宅千福・國辨成以下卅七人并五十許人、奉進朝堂、急引移向天子。

天子、恩勅見前放着。十九日賜勞、廿四日發自東京。」

―齊明七年記事―

伊吉連博徳書云「辛酉年正月廿五日還到越州、四月一日從越州上路東歸、七日到檉岸山明。以八日鷄鳴之時順西南風、

放船大海。海中迷途、漂蕩辛苦。九日夜僅到耽羅之嶋、便即招慰嶋人王子阿波

伎等九人同載客船、擬獻帝朝。五月廿三日奉進朝倉之朝、耽羅入朝始於此時。又、

爲智興僂人東漢草直足嶋所護、使人等不蒙寵命。使人等怨徹于上天之神、震死足

嶋。時人稱曰、大倭天報之近。」

プロパガンダに騙されるな

―学び直そう戦争と憲法の歴史(二)―

成瀬 和之

ドキュメンタリー映画「教育と愛国」を見ました。

日本も「いつか来た道」、そしてプーチンの道を歩み始めていることに衝撃を受けました。戦争プロパガンダが、マスコミと教育の支配を通じてどのように進んでいるのかよくわかる映画です。監督は、大阪・毎日放送の斉加尚代ディレクターです。

教育とメディアはなぜ標的にされてきたのでしょうか？プーチンはソ連時代の「負の遺産」を抹消する「歴史の修正」を行い、自国民の「愛国心」を鼓舞する材料としてきました。周到な準備の下にウクライナ侵略は開始されたのです。

「学者とは、真実を追求するものであるべきであり、教科書とは、その時代その時点での真実を子供たちに教えるべきものである。そこに、政治の入り込む余地はない。そこをはつきりと教えてくれる映画である。」

これは漫画家・声楽家の池田理代子さんの映画評です。既存の教科書を「自虐史観と攻撃するグループの東大名誉教授の歴史学者は、この映画の中で言い放ちます。

「(歴史から)学ぶ必要はないんです。」

啞然とします。例えば、三国同盟と三国協商の対立、つまり軍事同盟対軍事同盟の対立、言い換えれば「力に力に対抗する」ことが第一次世界大戦をもたらした世界史の教訓に学ばないで良いのでしょうか？「温故知新」は不要だと歴史学者が言うのでしょうか？

「教育の政治への介入は大阪から始まった。」

齊加監督はこう言います。二〇〇六年に教育基本法が改悪され、教育への政治介入の法的根拠が与えられました。それ

を受けて、安倍元首相と組んだ大阪維新の会が先頭となって、教育への政治介入が行われてきました。「君が代」を教師が歌っているかどうか口元をチェックするそんなことも行われました。この映画には「表現の不自由展」における会場使用問題での松井、吉村首長の暴言も登場します。

前回、一九三一年に日本の関東軍が起こした「満州事変」とロシアのウクライナ侵略が重なって見えると書きました。二〇〇三年の米国などが乗り出したイラク戦争についても書きました。曲がりなりにも米国などはイラク侵攻戦を「過ち」と総括しましたが、日本政府は、イラク戦争への支持・支援が適切だったのか総括すら行っていません。

さらにさかのぼると、アメリカによるベトナム戦争を思い出します。バイデン大統領はプーチン大統領のことを「戦争犯罪人」と呼びました。その通りです。それならば、ベトナム戦争を拡大させたジョンソン大統領もニクソン大統領も「戦争犯罪人」だったのではないのでしょうか？枯葉剤の被害は、今なお、ひ孫の代までも続いています。

「沖縄なくしてベトナム戦争を続けることはできない」

北爆が開始された一九六五年の一二月に当時のシャープ米太平洋軍司令官はこのように言いました。米軍戦争下の沖縄は、ベトナム戦争の出撃・兵站拠点だっ

たのです。在日米軍基地はイラク戦争でも侵攻の拠点になったのです。

まがりなりにも米国などはイラク侵攻戦を「過ち」と総括しましたが、日本政府は、イラク戦争への支持と支援が適切だったのか総括すら行っていません。

そして、この五月二三日日米首脳会談です。バイデン大統領は成田空港でも羽田空港でもなく米軍横田基地に降り立ちました。

会談後の共同記者会見で、敵地攻撃能力の保有に向けた検討を進める岸田首相は、それを支える大軍拡を進める考えを対米公約しました。

元海上自衛隊三佐、元ジブチ派遣整備補給隊長だった形川健なりかわ一さんは次のように言います。

GDP比二%にするといいますが、今の防衛費はほとんど無駄ばかり。米国製兵器の爆買いや防衛産業を潤すことが「二%」にする理由では、二%分の約十一兆円は国の予算の一割超で、世界第三位の規模。軍事大国ですよ。

外交ジャーナリストのフアリード・ザ

カリア氏は米紙ワシントン・ポスト四月二九日付コラムで、「民主主義対専制」の構図は外交技術として正確でもなければ、有用でもない」と主張しています。力で国境線を変更するという極め付きのルー

ル破りを犯すロシアに対するには、「民主対専制」の押し付けではなく、「ルールに基づく秩序」の回復と言うより包括的な国際協力が必要だと述べています。ザガリア氏によれば、「民主対専制」の構図は、ほとんどの途上国を非常に不安にさせる」と指摘しています。

米紙ウォール・ストリート・ジャーナル四月一四日付も、「民主対専制」の価値観で対口圧力を強めようというバイデン政権の方針に多くの途上国がついていけない状況を指摘しています。

「独裁が民主主義を侵略するのと、民主主義を掲げて独裁を倒すのは違う」と言う人がいます。かつて米国が韓国の朴正熙独裁政権を公然と擁護し、軍事的支援を豊富に与えました。あまりにもあからさまな「二重基準」ではないでしょうか？

ロシアによるウクライナ侵略をめぐり、「力こそ正義」と言わんばかりの主張がふりまかれ、敵基地攻撃能力や「核共有」という議論まで飛び出しています。

日本総合研究所会長の寺島実郎さんは「話は逆で、『大国の横暴』の時代がいま静かに終わりつつある」と次のような内容の話をしています。

三月二日の国連総会は一四一か

国もの賛成で、国連憲章違反だと非難した決議を採択し、「ロシアの孤立」を印象付けました。旧ソ連でつくる独立国家共同体(CIS)、加盟国は九か国)の中でロシ

ア非難決議に反対したのはロシアとベラルーシだけでした。いかにロシアが孤立しているのかを象徴しています。

超大国の米国がイラク戦争で撤退を余儀なくされたのも「大国の横暴」だったからでしょう。

黒海艦隊の旗艦まで失い、「力こそ正義」が間違いだっただけで知らされているのが、今のロシアです。

「大国の横暴」の時代はいつかには終わります。世界は全員参加型秩序に向けて歩み始めています。

さて、憲法の話です。近年の世論調査で憲法改正の是非について、「改正の必要があると思う」という回答の割合が、じわりじわりと増えています。

ところで、憲法とはそもそも何でしょうか？ 法律と同じなのでしょうか？ 権力者の暴走から国民を守る国のしくみが憲法だったのです。

日本国憲法九九条は「国務大臣、国會議員などの公務員は「この憲法を尊重し擁護する義務を負う」と定めています。権力を持つ側が、その憲法をかくも公然と変えたがっているのは何かおかしくはありませんか？

まして、かつての侵略戦争の反省もせず、憲法を軽んじ遵守もしない現政権が

憲法を変えたとして、その憲法を守ると思えますか？

日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介さんは次のような内容の発言をしています。

そもそも憲法は自国の権力を縛るもので、他国の権力者を縛るものではありません。「国を守るために改憲を」と言うのは「言霊信仰」そのものです。

全ての戦争は、「自衛のためにやむを得ず先制する」と言い訳して始まります。

そうした言い訳を封じ、いかなる理由があっても先制攻撃を封じているのが憲法九条です。先制を受けての自衛は憲法も認めています。

「自分からは侵略しない」と明言する国を一つでも増やすことが、この世界を少しでも安定させることにつながります。逆に「核抑止力」こそ神話です。

日本は、「平和国家」として世界に大きなブランドを確立しています。このブランドを自ら壊すことはありません。

リアリストとして日本の平和を守るために提言したいのは、東アジアの近隣諸国と戦略的に連携していくことです。

「大東亜戦争はアジアの解放の

聖戦だった」などと言うのは、プーチンを正当化しようとするロシアの宣伝と同じで、日本の信頼を損なうだけです。

さらに五月八日付毎日新聞夕刊で松尾貴史さんは、「権力者の口車に乗ってはいけない」という見出しで書いています。「ナチスの手口に学んではどうか」という麻生元首相らしきイラストを添えて。

戦争「プロバガンダにだまされるな」というこのシリーズの表題と同様の見出しに、心強く思います。

そういえばドキュメンタリー映画「教育と愛国」の監督をした斉加さんも毎日放送のディレクターです。毎日新聞の健闘が光ります。

それでも納得いかない方は、ぜひ映画「教育と愛国」をご覧になってください。

俳句

土田 裕

母の日を妻の日として贈り物
沼の面へホルンめく声牛蛙
初夏や棚田百枚色一枚
常よりも足を延ばして緑の日
大寺に鳴き声しきり黒鶉

影山 武司

真つすぐに南へ水路夏立てり
止め跳ねに力溜めたる立夏かな
葉桜のたつぷり風を抱きをり
ハイジャンプ五月の風を滑空し
新樹光朝の紅茶に溶かしをり
緑さす音楽室の肖像画
薫風や子らの鼓笛の銀モール
緑陰や小さき祠は柿葺き
神木の縄張りつめて樟若葉
筆先のまとまり悪しき走り梅雨

編集後記

SK生

梅雨の時季となった。五月闇という言葉もあるが、我らの周辺は明るさに乏しい。せめて一隅を照らす一灯ともなればの思いで今回も編集を終える。最近よく思うこと。なぜ人間は、人類は共に哀しみ喜ぶようにならぬか、と。文明とは詮ずるところ人の心の状態なのか。



馬酔木図

季節の花々



ササユリ



京鹿の子



紫陽花苑

人間をうたうと笑いが生まれる

私（山椒魚）のあぶくのような句であるが、川柳とはそういうものだと思う。伝統俳句を率いた虚子が、

去年今年貫く棒の如きもの

こんな句を詠んでいることを知ったとき驚いたものである。俳句は、人間の目とおしてであるが、花鳥風月いわば風景を詠むのだと思っていた。人間は句の遠景に、たいていの場合、埋没させられている。まさか風景の中を貫く棒を詠んだのではないだろう。

誤解を恐れずに言えば、風景を詠むとは、たとえばこんな句である。

枯枝に鳥の止りけり秋の暮

芭蕉

遠山に日の当りたる枯野かな

虚子

もしこの句を、名を伏して川柳として投句すれば、川柳の先生は先ず、「川柳は普通の話し言葉で書きなさい」と言うだろう。いやいや、そんなことを言う前に（怖れ多いことではあるが）、「だからどうしたの。只の説明句じゃない」と一笑に付すだろうと思う。言うまでもないが、先

の二句を読むと、秋の暮の中に、また枯野の中に佇む男の姿が浮かんでくる。そして男の姿に何を重ねるかは、最後まで読み手に委ねられている。それを「良し」としないのが川柳である。「魂は表現されなければ、それが存在するかどうか、当人にさえもはっきりしない」と、川柳も言うのである。

しかし俳句も、率直に人間を詠めば面白くなる。たとえば、

手で顔を撫づれば鼻の冷たさよ

一を知って二を知らぬなり卒業す

なんといずれも虚子の句である。人間性がポロリとあらわれると笑いが生まれる。川柳は、人間が一番面白い存在なのだということを主張する。古川柳も詠う。

本降に成って出て行雨やどり

わがすかぬ男のふみは母に見せ

なきくもよい方をとるかたみわけ

人間の所業、人情、性の本質を衝き穿つ。そこに川柳が生まれる。

○風を詠む―女性が詠んだ川柳

川柳では、風の中にも人間がいる。以下、田口麦彦『現代女流川柳鑑賞事典』（三省堂、二〇〇六年）から引用。

風と歩いてたくさん聞いた風の声

長浜美籠
一陣の風から貫う比喻暗喻

西出楓葉
思考を奪ったのはむらさきの風

播本充子
抱きしめた風はあなたの温度です

やすみりえ
花散らす風の懺悔を聞いてやる

山本希久子
河わたる風より蒼きもの抱いて

本多洋子
薔薇抱いて風より前に出たくなる

長島敏子
靴の底抜ける風ありひとりの訃

山倉洋子
○「五七五降る言霊をそつと受け」

十七音の小さな世界をつくる言葉。必死になって言葉を探しても、ひらめくものではない。いや、必死になればなるほど、ひらめかないのかもしれない。「ひらめきは、不意に思考の戸を叩く」。そして、「空から降る言霊を待ち五七五」は完結する。

言霊が降るのでそつと受け止める

ふじむらみどり
橋の名を川の墓標にして水都

合田実
かんざしが泣く文五郎泣かず泣く

岸本水府
挽きたての言葉しつかり鍵をかけ

久保内あつ子

寄り添って生きますふり仮名のよ
うに

薬師神ひろみ
とある日の菊がトテチテタとひら
く

尾藤三柳
ビル、がく、ずれて、ゆくな、ん、

てきれ、いき、れ

なかはらしいこ

2001.9.11のニューヨーク。

世界貿易センターのツインビルが見る見る崩れ落ちていったとき、その

「美しさ」は平仮名を散らして表現するほかなかつたかに思える。

